

URBAN SPORTS



パークで4位入賞の岡本碧恵(みずく)。メダルには届かずもそのチャレンジ精神は感動をちえた

解放区で目にした
社会の理想型

文 藤田実夫
写真 西藤洋行

崩されていた
五輪の概念

無観客の箱物ならともかく、無観客の仮設スタンドは異様な風景だった。太陽に晒されただけのプラスチック椅子は、人の温かみを感じることなく解体されていくのだ。逆に「もしも有観客だったら」という想像も伴うので、やるせない想いは募る。いわゆるアーバンスポーツ(スケートボード、スノーボード、スノーシュー、BMXなど)は、「一線にそんな空気を纏っていた」。

ただその無機質な空間こそが、選手たちをより輝かせて見せたとも言える。ナシヨナリズムや勝利至上主義から逃れられない者からすれば、そこはまさに近くて遠い「解放区」だった。

朝人的には「スケートボードが五輪競技になる」と聞いたとき、若干の違和感を抱いていた。もちろんIOCが方針として、若者を取り込む狙いは承知している。時代の流れと言ってしまうは簡単に片付くが、昭和生まれのスポーツお高麗さんにとっては、小さくないニュースだった。おそらく令和の世、スケボーの五輪参戦はむしろ当たり前と思う人の方が多かったかもしれない。賛否を論ずるつもりはまったくない。如何に自分が時代の風を捉えられていないか、その事実を見せつけられた気がしたからだ。

実際、アーバンスポーツ元年となった東京大会では、日本人が大活躍した。とりわけスケートボード女子ティーンエイジャーたちの活躍は、同世代以上に大人の世代にインパクト

競う相手を
敵と見なさない感性

女子パークの決勝で、象徴的なシーンがある。4位で最終試技に臨んだ岡本碧恵(15歳)は、最後に高難度のトリック(フリップインディ)に挑む。しかし惜しくも転倒。メダルには届かなかった。涙に唇ながら引き上げる彼女を運送したのは、ともに戦ったスケーターたちだった。メダルに固執するなら、難度を下げる選択もあった。ただ東敵に挑んだ岡本を、仲間のスケーターたちは讃えた。私たちはコンテストでメダルをとるためにだけにスケボーをやっているわけじゃない。そんなメッセージが聞こえてきそうなシーンだった。ストリートで日本五輪史上最年少(13歳)の金メダリストとなった西矢は、試合直後こう語った。

「他の人も応援してくれるから、最後まであきらめずにやろうと思いました」

ここでいう「他の人」とは、今一緒に競い合ったライバルのことを指す。もしかすると彼女たちに、競う相手を「敵」と見なす感覚はないのかもしれない。この純粋な感性に、どれだけの大人ががついていけるだろう。かく言う私も、その感性の壁を前にして、ただ行んでいいだけだ。

さらに無視できないのは、スケートボードの競技特性である。採点競技のスポーツにおいて、ひとつのミスが命取りという実情は多々ある。しかしスケートボードという競技は、ミスに寛容だ。何度かトライする中で、ベストパフォーマンスがチャイムされる。リセットボタンがあり、だからスケーターも思い切つてトライできる。転んでもまた立ち上がりればいい。そんな感性も醸成されるだろうから、結果世界中の若者に支持されるのも理解できる。パーク3位のスカイ・ブラウン(イギリス/13歳)のヘルメットには「勇氣をもつて、楽しもう!」と刻まれていた。

トを与えた。ストリートで優勝した西矢権が13歳。3位の中山楓奈が16歳。パークで優勝した四十住さくらが19歳。2位の開心那においては12歳である。

「低年齢選手なので、オリンピックの大きさはまだ分かっていないんです。そこから生まれる、いい雰囲気」なので、僕らも「オリンピックだから」とは言わないようにしています。

当時日本代表でコーチを務めた早川大輔の解釈と対応は、理解できるものだった。ただ金メダルという到達点から眺めれば、それは小さな要因にすぎない。トップスケーターともなれば、高難度のトリック(技)のメイク(成功)に、1年以上の歳月を費やす。そんな背景を考えると、そのコンテストに折り合いをつけて受け止めることは難しい。

大人世代が10代のスケーターから受けたインパクトの理由は、「若さ」だけではないはずだ。とにかく現場で見れば、アップのときからひたすら楽しそうな選手たちが見当たらない。五輪という舞台で自分が慣れ親しみ求めてきたものは、明らかに違う雰囲気支配している。「プレッシャー、緊迫感、それとは対極にある、自由で、開放感のあるワールド」に見えた。五輪とはこういうもの——そんな自分なりの概念が崩されていく。スケーターたちは局面に関わらず常に声を掛け合い、笑い合い、励まし合っていた。



ストリートで日本五輪史上最年少(13歳)の金メダリストとなった西矢権(もみじ)



結果を恐れず最後までトライした岡本を讃える仲間たち

みんなが 認め合えるような社会に

相手のミスは自分にとつてのプラス、それは紛れもないスポーツの宿命である。もちろんスケートボードも例外ではない。ただそこを乗り越え求めるか結果に委ねるかでは、少し話は変わってくる。明らかに後者の若きスケイターたちは、いい意味で自分だけを見ていた。だからこそ、競う相手のことさえ、フラットに応援できるのだろう。大人世代がインパクトを受けた本場の理由、それは計算のないビュアな仲間意識を見せつけられたからではなかったか。仲間を思い、支え合って競い合う姿が、眩しかったのだ。私たち大人が常に考えながらも実現できない社会の理想型が、有明アーバンスケートパークにはあった。

テレビの中継、連日のメダルラッシュを受けた解説者の言葉が印象的だった。

「今まで日本では、スケボ」といえば「不良」「迷惑」なイメージがほとんどだったと思うんですが、今日からそのイメージが変わることを望んでいます。スケートボードをしている人、していない人が共存して生きていく社会、みんながみんなを認め合えるような社会になってほしい」

東京オリンピックの閉会式終盤、東京パリのハンドオーバースセレモニーが行われた。コロナ禍、フィールドにフランスからの演者はいない。この儀式もまたリモートが駆使された。パリ五輪の会場紹介で大型ビジョンに映し出されたのは、B.M.X. スケートボード、ブレイキン、主役はアーバンスケートボード。決して新しさの表現ではなく、多様性の表現なのだ。さすがフランス、センスがいい。30年前、ヨーロッパを放浪していた頃、エッフェル塔前のトロカデロ広場でスケボに興じる若者をスナップしたことを思い出した。アーバンスケートの風、東京からパリへ。